

# 領邦国家ドイツとフランス革命

—政治家ゲーテ—

渡 邊 直 樹

はじめに

18世紀のヨーロッパ世界を揺るがした三つの出来事、それは1755年11月1日ポルトガルのリスボンに起こった大地震、アメリカの独立戦争（1775—1783）、それに1789年に勃発したフランス革命だといわれる。ゲーテは自伝『詩と真実』（Dichtung und Wahrheit, 1832）において、特にヨーロッパで起こった二つの事件、地震の脅威と、暴力と結び付いた革命的概念が初めて現実となったときの恐怖とを、記憶も新たに鮮明に書き記している。また晩年81歳にしてなお、パリの7月革命とリスボンの崩壊とをあげ「リスボンの地震がほとんど一瞬のうちにその影響をどんなに遠くはなれた海や湖にも及ぼしたのと同様に、ほぼ40年前のあの俗世の爆発には震撼させられた」<sup>(1)</sup>と語っていることは、これらの衝撃の大きさを物語って余りあるものといえる。

パリの革命には終始懐疑的であったこのゲーテを始め、当初熱狂的に歓迎したものの、その血生臭い展開に嫌悪をいだくようになったクロプシュトック、「哲学の実践である」と冷静に分析してみせたりヒテンベルク、『トイチャー・メルクール』（Teutscher Merkur）誌において、絶えずやはり懐疑の目もちつつこの革命を伝えたヴィーラント、その精神の一部を限定付きで、例えば男女平等の権利、などをたたえたシラーやフンボルト、ナポレオンをドイツの「解放者」、「世界精神の具現者」とさえみなしたヘーゲル、最終的に反ナポレオンレジスタント、愛国者となったフィヒテなど、同時代の人々の反応はそれぞれの立場と思想を踏まえ多様であった。

本稿は、わずか数百キロの距離を隔てたフランス・パリの革命を、「対岸の火事」として片付けられない深刻な事件として受け取り、拒絶的な反応を示したドイツの支配層、複雑な心情を垣間みせた知識人らの反応を、フランス革命とドイツの精神・社会状況との関

係も顧慮しつつ考察する。この際、一小公国に過ぎなかったとはいえ、少なくともヴァイマル宮廷に仕え、実際の政治にかかわっていたゲーテの行動に焦点を当てよう。なぜならば、18世紀後半から19世紀のドイツ精神の展開史において、ゲーテが果たした重要な役割を考慮すれば、ドイツ社会の展開史における「政治家」ゲーテの信条、理念にもそれなりの注意が払われてしかるべきである、と考えるからである。

### (1) 革命への反応

ゲーテは、1775年11月、27歳で弱冠18歳のザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ公国のカール・アウグスト公により友人にして顧問としてヴァイマルに迎えられ、翌年6月枢密顧問官として正式に政府の閣僚に列せられ、1832年3月の死に至るまでその官職を全うした。公国全体の人口が12万余りで、ヴァイマルは6千人を数えるに過ぎない、ほんの小公国であったにせよ、ゲーテは国力の充実と国民の幸福のために57年間にわたり努力を払った。このゲーテにとっても隣国フランス・パリの革命は一大事件であった。

1789年7月のパリの革命の報がヴァイマルにもたらされたとき、ゲーテは40歳少し手前であった。十年にわたる政務の疲れからか1786年7月「逃げるよう」にしてイタリアへ旅立ち、約2年3ヶ月に及んだ滞在からヴァイマルに戻ってほぼ一年が経っていた。そしてイタリアでの様々な体験を基に気分も新たに、政務に、文化、芸術分野に、とりわけ自然研究にとその活動の幅を広げつつ、成熟へと向かう時期でもあった。ゲーテは、確かに驚いたに違いない。1822年から25年にかけて、この時期を思い起こし記した『ノート』

(Tag- und Jahreshefte)に「私が、イタリアから帰った後で、ヴァイマルの生活に、そこでの状況に、仕事や研究や、文学のことにまた向かおうとするかしないうちにフランス革命が起こり、世界の注目を引いた」とある。<sup>(2)</sup>政治に携わっている者として、また自由のために闘った勇士『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(Goetz von Berlichingen, 1774)の作者として、ゲーテは心の中で大変な葛藤を経験しなければならなかったであろう。後年『詩と真実』においても人間の自由と正義を要求し「圧政からの解放という賞賛されるべきスローガンが予想外の不幸な結果を引き起こした」<sup>(3)</sup>フランス革命の経過を、一種にががしさをもって回顧している。つまり、ゲーテは、生涯この革命を歓迎したことはなかったのである。しかしながら、もちろん改革の敵ではなかったし、革命という概念そのものについても、手段は別にして、始めから拒否していたわけではなかった。

そもそも、あの『ヴェルター』(Die Leiden des jungen Werthers, 1772)のモデルの一

人とされるケストナーが行政官としてヴェツラルへゲーテを招聘しようとしたとき、彼は「自分の能力、才能を本能に従い自身のために使うことになれているので、それをもっていかなる君主にも仕えることはありません」と答え、官吏への道に距離を置いていた。<sup>(4)</sup>ライプツィヒで法律を修め、弁護士として郷里フランクフルトにて活動を開始したゲーテは、社会の矛盾には気がついていても、これを近代の社会階級としての支配層对被支配層、君主・貴族対市民という政治的対立的構図の中で把握しようなどとは、思いもしなかった。フランクフルトの名門の家柄、市長を勤めた祖父、宮中顧問官の称号を持つ父、こうした環境の下でゲーテにおいては実際の、政治的というよりもむしろ創造的芸術的関心が優っていたのである。

1782年4月17日ゲーテはクネーベルに宛て、次のような手紙を書いている。「もし農民が自分のためにのみ汗し、彼らが大地からそれなりに暮らしていける最小限のものだけをとっているのを見れば、快適な生計といえるでありましょう。でも知っての通り、もしバラの枝にアブラムシがいて、樹液をたらふく吸ってかわいらしくなったら、蟻がやって来てそれらのろ過済みジュースを飲んでしまうでしょう・・・私たちは、現在、下のものが一日で収穫するよりも多くを上のが消費する、という段階にあります」<sup>(5)</sup>と。このように、フランス革命を体験する以前のゲーテの考えにも、確かにヴァイマル宮廷とアウグスト公の「絶対主義」政治に対する批判的姿勢は見て取られる。ヴァイマルに迎えられ、政治に参画し、念願のイタリア旅行をも体験することができたゲーテは、パリ革命の勃発に驚愕したとしても、この意味で、身に付けた適切なバランス感覚をもって革命を分析し、考察することもできた。しかしながら、悪の根源を王政とその支配体制と見なすフランス革命を担った思想家たちや第三階級とよばれた急進派などについて、なんらの理解も有しなかった。革命がすでに過去の出来事として歴史的にもまた自己の精神のうちにおいても決着した時期に至って初めて、市民階級と貴族階級という階級的対立、あるいは両者の協力による「時代に適った改革」の必要性が彼の意識にのぼったといえるのである。

ともあれ、ゲーテにおいては、むしろ自由、平等、正義というフランス革命のブルジョワ的スローガンが倫理的、道徳的問題として人間精神の課題へとすり変えられた。戦争の時よりも平和の時の方が、独立への欲求が生まれる。「人間にとって自由の感覚は平和時にますます主張され、自由になればなるほど、一層自由でありたいと思う。・・・私たちは制約を受けることは望まないし、誰も制約を受けるべきではない。そしてこの病的な感情は正義という美名の下、やさしき心の中に現れる」と。<sup>(6)</sup>アンシャン・レジームが崩壊

した後もゲーテは革命を階級の問題としてではなく、倫理的なそれとして思索し、解決し、自分なりに昇華しようとしたに違いない。1790年3月3日、ゲーテはF.H.ヤコービに宛て次のような手紙を書いている。「フランス革命は、私にとっても一つの革命であったということは、君にも考えられるでしょう。そもそも私は古代の人々を研究し、テューリンゲンにおいて（『ローマ悲歌』の作品で）すすめようとしているように、彼らの例に従っています。私のタッソーは君に気にいるだろうと思います」と。<sup>(7)</sup>この手紙はゲーテが、自己のシュトルム・ウント・ドランク時代をヴァイマルにおいて克服したと同じように、創作姿勢になぞらえて、政治の現実と理想との狭間に潜む精神の葛藤を彼なりに処理しようとしたことをも窺わせる。また同僚Ch.G.フォイクトに宛てた1789年10月初めの手紙でも実際のイルメナウ鉱山の開発の困難さにたとえ、「原因と結果においてあらゆる事件のうちでも最も恐ろしい」フランス革命を「詩的に克服することのたいへんな努力」<sup>(8)</sup>について語っている。これらのことは、ゲーテのフランス革命に対する本来的関心の高さ、この政治事件と自己の現実との邂逅を試み、苦悩する彼の内的精神をも表すものであろう。ところで、フランス革命勃発直後、ゲーテが直接言及した革命観については、不思議なことにこれらの書簡以外にたどることはできない。1789年から90年の間にC.アウグスト公と交わした書簡においても、政治問題は避けられなかったであろうにもかかわらず、革命については沈黙している。確かに、隣国とはいえども、ドイツでは革命の進捗状況は判断し難く、掲げられた中心的要求についての概念そのものも理解し難いものがあったことであろう。それを割り引いても、このゲーテの沈黙は、何を意味するのであろうか。

1789年のパリ革命をめぐって、ドイツでは当然賛否両論が渦巻いた。1790年にはイギリス人E.バークが著わした革命に否定的な『フランス革命考』（Reflections on the Revolution in France）が、ドイツ人F.ゲンツにより独訳（Betrachtungen ueber die franzoesische Revolution）出版され、一方、肯定派も同年J.H.カンペが『パリ便り』（Briefen aus Paris）において新しい時代の到来と「名声にかかわらず全ての人々の権利と平等の国」への期待を表明している。1789年クロプシュトックは革命を賛美し、詩『汝らを知れ』（Kennet euch selbst）を「フランスは自由になった。世紀のもっとも偉大なる行為は、オリンピアの神の座へと高められた」という文句で書き始めた。<sup>(9)</sup>

また、ヴァイマルで『トイチャー・メルクール』誌を発行していたヴィーラントは、すでに1789年9月に「その時、フランス国民が啓蒙主義思想とその長所を利用した合法性について」と題したいわゆる模擬対話を掲載し、革命の長所短所を浮き彫りにしている。

この中でヴィーラントは、変化を擁護するものにこう言わしめている。「絶望へともたらされた国民の行動は、その本性に従って狂暴となり、誰もその結果に責任を負うことはできない。ただ国民を専制的であるのと同様の非理性的規則によって絶望へと追いやったもの以外は」と。<sup>(10)</sup>すでに1792年9月に始まり、1790年1月のルイ16世の処刑も不可避であることを暗示するかのようなヴィーラントの洞察は、一人彼だけのものではなかった。クロプシュトックは、1793年、今度は詩『私の誤解』(Mein Irrtum)で「ああ、金色の夢の喜びは去ってしまった。朝の輝きはもう私の回りにはない。恋に破れた苦悩が私の心を苛む」と嘆かざるをえなかった。<sup>(11)</sup>

ドイツにおいては、啓蒙主義精神に依って立つブルジョワが誕生し、君主たちと対等な交渉関係を構築できるまでの経済的社会的思想的基盤が確立されていなかった。また、領邦が100以上にも分立し国家の体をなしていないドイツで、国民が政治的要求を統一的な形で実現することなど全く不可能なことであった。フィヒテは「ドイツ民族の民族としての歴史とその純粋性を強調し」<sup>(12)</sup>、ドイツ的文化理念の形成の訴えをもってしかフランスの理性と革命、そしてナポレオンに対する戦いを宣言できなかった。確かに、この革命に呼応した政治的事件がドイツで全く起こらなかったわけではなかった。ザクセン、メクレンブルク、シュレージエンではちょっとした騒動が起こり、テューリングゲンでは若者に扇動された農民の反乱もあったが、いずれもとるに足らない小事件として片付けられ、支配階級の体制に揺るぎはなかった。ヴァイマルのC.アウグスト公は、ゲーテの同僚でもある枢密顧問官シュナウスに宛て次のような手紙を書いている。「腹立たしいことに私の国の農民たちが、愚図どもに反乱へと唆された。その芽を摘めば悪いことにはなるまい。ドイツの俗人は服従の意味を知っている」と。<sup>(13)</sup>この内容は当時の支配層の考えを概ね代弁したものと言える。

フランス革命の精神に同調しつつも、革命の社会的背景を理解できないままに、その結果に失望したドイツの知識人、緊張はしたものの現状の体制維持に自信を示した支配層、ドイツはこうした精神、思想、社会の状況の中で静かにフランス革命の行方を見守らざるをえなかったのである。

## (2) 「政治家」ゲーテ

ゲーテの多彩で、後世に大きな影響を与え続けた活動はさておき、取り上げられることは少ないが、ヴァイマルのアウグスト公に仕えた政治官僚としては、いかなる評価を下

すことができるのであろうか。

良くない部分を改革し国民の利益を図るといふ政治の目的は、誰とて目指すことであろう。イルメナウ鉱山の開発、イエナの河川工事、イギリス人ベイティを招いての牧草地の灌漑工事、軍隊の縮小、エアフルト－ヴァイマール－イエナを結ぶ道路の建設、橋の整備など目に見える問題のみならず、財政、税制、社会、商業政策などさまざまな経済上の諸問題にもゲーテなりにかかわらなければならなかった。ゲーテは、義弟シュロッサー、友人メルクラを通してケスネイによって基礎付けられ、フランス人チュルゴーによって実践された重農主義を学び、アダム・スミスの自由論をも研究した、と考えられている。この過程でゲーテは、眼前の困難さを慨嘆もし、しばしば友人に愚痴を洩らすこともあった。あるいはまた深刻な事態は既存の体制の変革なしには不可能であることも、認識しなければならなかった。たとえば、これらの仕事は、ゲーテに自然研究、芸術、創作活動において実り豊かな成果をもたらし、害になることなどなかったとしても。

ところで、ゲーテは、1790年の初めプロイセンとオーストリアとの間の戦争を回避し、仲介すべくベルリンに滞在していたアウグスト公に「うまくまとめて下さい。そして私たちに愛すべき平和の証拠をもたらして下さい。というのも、本来戦争の目的は唯一平和でありましょうから、戦いなしに平和が維持できるならば兵士にはこれにまさることはないでしょう」<sup>14)</sup>と手紙を書いている。ゲーテは戦いは好まなかった。

『ゲーテの政治的修行時代』(Goethes politische Lehrjahre, 1893)の著者O. ローレンツは、特に、ゲーテの外交手腕に注目している。「ゲーテは、1778年の君主同盟成立の基礎を確立した」と。このことは、ゲーテがザクセンとヴァイマールとの同盟を推進することによって、共同して当時のドイツの二強国オーストリアとプロイセンとに対抗していきこうと画策したこと意味している。これは、専ら政治家としてのゲーテの能力に負っているのかどうか。

その真実についてH・テュムラーは当時のヴァイマールが置かれていた歴史的状況を詳細に研究している。つまり、このこと背景にはバイエルン継承戦争に絡み、オーストリア皇帝ヨーゼフ二世の領土的野心をプロイセンのフリードリヒ大王が軍事行動によって牽制したことがある、と。ドイツの他の小公国は、この紛争に巻き込まれることを恐れ結束をもって調停に動いた。ゲーテは、1778年アウグスト公とともにベルリンに出かけ、フリードリヒと会見し、和平への道筋をつけることができた。結局のところ、1779年5月プロイセンとオーストリアとの間にはテッシェンの和議が成立する。そして1780年代の始めには、

C.F.v.バーデン辺境伯、L.F.F.v アンハルト-デッサウ公とともにアウグスト公もこの同盟計画の重要な役割を担い、ゲーテもこれを推進する立場にあった。ゲーテが、始めからこの理念の代表者とされるのは、この時、アウグスト公の行動がプロイセンのF.ヴィルヘルム王子と義兄弟の関係にあることも手伝ってか極めて積極的であり、常にこの計画の中心として働いたからかもしれない。

ともあれ、目指した同盟がハプスブルク家の勢力拡張に反対するもので、このことはプロイセン寄りの姿勢を明示するものであった。とりわけ、いわゆる啓蒙専制君主と言われた王子フリードリヒ・ヴィルヘルム二世に期待した。彼は、父の獅子王がただプロイセンの利益のみ追究したのに反して、ドイツの小公国の状況によりよい理解を有していると考えられたのである。この過程で果たしたアウグスト公の役割は大きいものがあつた。一家は、この王子と連携をはかるため1784年の夏と秋の二度、ブラウンシュヴァイク、つまり伯父のC.W.v.フェルディナント公とドイツ南西部の「帝国」、オーストリアのヨーゼフ二世の下へ旅行している。この時アウグスト公は強くゲーテの随伴を要請したのである。ゲーテは、一回目の随伴には同意したものの、二回目は驚くべきことにこの命令を拒否している。ゲーテはブラウンシュヴァイクからシュタイン婦人に宛た「フランス語」による手紙によれば、彼女と長く離れていたくはないという表むき理由と、「今やもうフランス語は必要ない」<sup>(45)</sup>という意味深長なことばが認められる。そもそも、ゲーテは、こうした行動には慎重であつた。とりわけプロイセンのフリードリヒ二世の好戦的性格には嫌悪を抱いていた。また、フリードリヒと縁戚関係にあるアウグストが企む君主同盟の目論見に対するウイーンの猜疑心も十分に感知し得る立場にあつた。まさに1786年8月この王の死後数週間で、ゲーテはカールスバートからイタリアに向け旅立ったのである。この瞬間C.アウグストはドイツの政治の混乱に巻き込まれ、この渦の中で翻弄されるのである。バーデン辺境伯への手紙に、「ドイツの君主はいずれも自分の国を鳥のように・・・見なそうとし」「島民たちを自分勝手に幸福にも不幸に馬鹿にも利口にもしようとする」<sup>(46)</sup>と記したように、苦々しい気持ちの中でアウグストのドイツ統一の願望はまさに挫折に至る。そして彼は、政治の一線から半ば身を引くことになる。

1790年のヨーゼフ二世の死後、ライヒェンバハ会議においてドイツの二大国間の友好関係が復活される。これは、また「革命的フランス」に対抗するという共通の利益の下でいわば一時しのぎの平和でもあつた。ゲーテが、その後即位したレオポルト二世の意を受けて両国の連合に果たした役割は大きい。ゲーテは、まさにイタリアからの帰還とともに、

フランス革命の勃発を聞き、そしてドイツの和平の実現に動いた。確かにこの点において、アウグスト公の企図した君主同盟はそれなりの役割を担った。この同盟に懐疑を抱きつつ、政治を避け、イタリアに遊んだゲーテにとって皮肉なことに、ワイマールに戻ってまたもやその中に飲み込まれざるを得なかった。しかもアウグストの企画の上にまたオーストリアとプロイセンの和議も成立し得たのである。そして今度は、ドイツ国内の問題ではなく、隣国フランスという国際外交問題に翻弄されなければならなかったことは、歴史がゲーテをただ芸術、学問の人としてのみ名を記すことを許さなかった、といってもあながち不当なことばかりとはいえないであろう。

### (3) ゲーテのフランス革命観

フランス革命軍は、勢いに乗じてドイツ西部にまで迫り、またドイツ諸地域でもこの動きに呼応して散発的の反乱が起こった。もはやドイツ諸侯の誰もが、フランス革命を牽制することが正しく重要である、ということに疑うことはなかった。ヴァイマルのC. アウグスト公も、1792年6月始め同盟軍に加わり西に向かって進発し、フランクフルトを経由し革命軍が狙いとしていたマインツに着陣した。しかしながら、マインツは、同年10月21日フランス革命軍によって占領され、民主的革命理念の下で1793年3月17日「ライン自由ドイツ国民会議」が召集され、ランダウとビンゲンとマインツの間の地域が「自由独立統合国家」を宣言した。この国家は安全保障の見地からフランス共和国と合体するに及び、わずか2週間の「小独立共和国」に過ぎなかったとはいえ、ドイツの指導的支配層を反革命への連帯を強めさせるに十分であった。結局これら地域全体もドイツ同盟軍により1793年7月23日には奪回され、4ヶ月に及ぶ混乱は収拾されることになる。

ともあれ、ゲーテも、アウグスト公に従ったのは当然であった。彼は8月8日に出発し、20日にマインツに到着している。ゲーテは、後にこの時期のことを『フランス戦役』(Kampagne in Frankreich, 1792)、『マインツ攻囲』(Belagerung von Mainz, 1793)として書き残している。その『フランス戦役』8月23日付けノートには次のように記されている。「それから、私はゼマリングの仲間、フーバ、フォルスターの仲間、その他の友人たちと楽しい二晩を過ごした・・・学問と洞察を土台とし自由に好意的な戯れをいうことは、最も明るい気分にならせた。政治の事は話題にならなかった。皆んな互いに体を大事にしなければならない、と感じていた。というのも、もし彼らが共和主義思想を必ずしも全て否定するものでないならば、私はきっぱりと軍とともに行動するであろう。まさ



にこの軍隊がこれらの思想と影響に決定的な終末を与えるべきなのだから」と。<sup>(17)</sup>ここに登場する G. フォルスターは、自然科学者であり、マインツ宮廷に図書館司書としても職を得ていたが、後フランス革命に共鳴し、マインツのジャコバン党の指導者の一人となり、パリに客死する。彼は、革命が目指した民主主義を基礎とする共和制をドイツにおいても実現することを確かに目標とはしていた。しかしながら、祖国ドイツにその可能性が全くないことも良く知っていた。彼は、ゲーテも含め、ドイツの指導者たちに何一つ民主的ドイツが誕生する希望も見出せなかったのであろう。そして、おそらく絶望的な気持ちで自己の思想的信条を行動に移さなければならなかったのであろう。もっともフォルスターは、何千という人々が貴族という身分のため死を宣告され、断頭台のつゆと消えなければならなかったことに少なからず当惑を覚えたことではあろうが。

なによりもゲーテにとってフランス革命は、精神においても暴力的行為においてもヨーロッパ的秩序への、またゲーテ自身が実現しようとしていたドイツ的それへの挑戦と写った。このことは、当時のドイツの指導的立場にあった多くの知識人がたとえ一時的であったにせよ、パリの7月革命を好意的に受けとったのとは対称的であった。ゲーテがドイツにも甚大な被害をもたらした反革命の旗手、ナポレオンの登場にむしろ安堵し、後世に彼のひととなりを伝えることにもなった背景には、歴史的な批判は免れぬとしても、ゲーテの理想としたヨーロッパ的世界の復活を「征服者としてよりも、ヨーロッパの平和回復者」としての一人の偉人の下に、一瞬、垣間見られたせいかもしれない。ゲーテばかりではなく、イギリス人ワーズワース、コールリッジ、サウディ、イタリア人アルフィエリ、ピンデモンテら、同時代の精神を代表する文人たちが一様に革命に批判的態度を示したことは、フランス革命がうちに孕む矛盾を人間精神の鋭い洞察者たちがすでに看取していた、といえれば過言であろうか。

ともあれ、ゲーテは政治革命には終始批判的であり、フランス革命の暴力を伴う残虐性に極端な嫌悪を示した。「いかなる革命においても行きすぎは避けがたい。政治革命では、始めは普通あらゆる種類の権力の濫用を除くこと以外望まないが、あつというまに血を見る残虐行為に走るのである」と。<sup>(18)</sup>こうした考えをゲーテは生涯変えなかった。L. ベルネは、1830年の7月革命の後、11月20付け『パリ便り』においてさえ明らかにゲーテを指して「専制的下僕」「専制詩人」「反動家」などと呼んでいることは、むしろゲーテの一貫した「反革命的」政治信条を証明しているともいえよう。<sup>(19)</sup>

エッカーマンは、この日付けには疑義があるようだが、1824年1月4日ゲーテとフラン

ス革命についての話しに及んだことを書き記している。ゲーテは「私はフランス革命の時代のことを書いた。」「そして、それはある程度その時代の私の政治的信仰告白とみなしていいだろう」と語った。ゲーテは、フランス革命の経過の証人であり、パリから戻ったばかりで、自分のためにいかなる悪い教訓も引き出さなかった伯爵婦人のことを、彼女のことはそのままに貴族の代表的事例として取り上げる。「彼女は、国民は苦しめられるとしても、抑圧されることはないし、下層階級の革命的暴動は上流社会の不正の結果である」と信じている。彼女が言うには、自分に不当と思えるあらゆる行動は将来避けるつもりであるし、また他人のこのような行為について社交の場や宮廷で私の意見をはっきり言うつもりである。私はもはやいかなる不正にも口を閉ざすつもりはない、たとえ民主主義者と呼ばれることがあったとしても」と。ゲーテは、「この意見は全く尊敬に値する。それは当時のわたしの意見でもあったし、今でもそうだ。しかしその報いとして、私がくり返したくないようないろんなレッテル付けを私にしている」とも、一方また「人は私のあるがままを見ようとせず、私の真実を示すあらゆるものから目を背けようとしている」とも述べている。このことは、革命の経過の過程で揺れ動くゲーテ自身の心情を表わしているとともに、当時彼に浴びせられたであろう革命支持派と反革命派の両派からの批判をも窺わせる。ゲーテが、その暴力的性格故に、「フランス革命の味方となることはできなかった」が、「しかしまた専制の味方でもなかった」と述べるとき、フランス革命勃発前二年間のイタリア旅行はあるものの、それまでヴァイマルにおいてアウグスト公を支えつつ奔走した政治行動を顧慮すると、全く自然なことのように思われる。この意味で「大きな革命は国民ではなく、政治の責任である。政府が絶えず正当かつ目覚めていて、国民に時宜に適った改革をし、下の方から強制されるようになるまで逡巡することがないならば、革命というものは全く不可能である」というゲーテのことは、政治的というよりも、むしろ彼の理性的道徳的信条としてより説得力を有するものを感じられるのである。<sup>20</sup>つまり、ゲーテは、政治は外部の圧力によって改革されるべきものではなく、内部からの、いわば有機的発展の結果として理想的な形態に変化し得るものであると考えた。そして、いかなる政策もなんらの障害も摩擦もなく実現されるものではない、ことも知っていた。政治の中枢にいて、ゲーテは国民の利益のためにそれを実践したのである。

しかしながら、ゲーテは、人間の行動が根本的に理性的な力によって支配されているとは決して信じなかったのである。彼は権力からは最も遠い所に位置していた。少なくとも国民の利益を優先しようとした限りにおいては。この点において、ゲーテの歴史観は正し

かった。ゲーテは、政治の中に歴史を検証しようとせず、歴史の中に政治を検証しようとした。「時は永遠に進歩し、人間的物事は五十年毎に別の姿を得て、1800年には完全であった制度が1850年にはひよっとしたらずでに欠陥であるかもしれない」と。<sup>(21)</sup>つまり、フランス革命は、長い歴史の過程からみれば、ひとつの政治事件であり、新しい体制の始まりかもしれないが永遠に継続するという保障はない。その勃発の時点においてどうして評価など下すことができようか、というゲーテの歴史観は、その後の革命の展開史とそれを取り巻く知識人たちの反応を考えると、まさに正鵠を射たものであったといえよう。約35年という歳月を経てゲーテが、当時を回顧しつつ、自己の「政治的信仰告白」として、すでに一つの歴史としてフランス革命を語る時、このことは、彼の歴史観のみならずその予見の正しさをも明示するものといえよう。

ゲーテは、歴史を人間的営為の連続として把握し、時の移り変わりとともに思潮も、そして真実そのものも変わり得ることをすでに洞察していた。「七年戦争からアメリカの独立、フランス革命、ナポレオンの登場からその英雄の破滅にいたるまで、そしてそれに伴う様々な出来事の生き証人である」ゲーテではあったが、そのいかなる事例に遭遇した時にも自己の信念が揺らぐことはなかった。<sup>(22)</sup>つまり、人間の本性、自然の精神に反しない道徳性、換言すれば悟性・理性こそ常に判断の基本とならなければならなかった。ゲーテはこの歴史の高みに立って社会とその仕組みを考察した。

ゲーテは、くり返し、また誰に対してもフランス革命を念頭に置きつつの「略奪、殺人、放火に走り万民の福祉という偽りの看板の下に、ただ最も愚劣で自得ばかり目的とするやから」<sup>(23)</sup>に与することはできないと主張する。政治革命とは、改革という美名の下でエゴイズムと嫉妬との交錯した人間の闘争本能の結果に過ぎない、とゲーテには理解されるのである。ここには革命そのものが孕む本質的な問題点、とりわけ社会階級の存在に基づく諸矛盾に対する意識は皆無に等しい。「市民は、神によって生まれながらに指示された階級に留まる限りは貴族と同様に自由である。貴族も、君主同様に自由である。もし宮廷においてのみわずかの儀式を見て、同等と感ずる限りにおいては」<sup>(24)</sup>というゲーテのことばは、社会階層の分化をアプリアリなものではなくアポストリアリなものとして把握し、人間の自由、平等、正義はむしろ個人の認識の問題であるという意識を持っていたことを窺わせる。この意味でゲーテは、社会階級と政治的イデオロギーを結び付けて考えることは決してなかった。「貴族主義と民主主義については絶えず多くのことが語られている。このことは全く単純なことだ。つまり、何も持たないあるいは所有を評価できない若い時代

には、私たちは民主主義者である。しかしながら、長い人生において何か所有するに至ったならば、私たちはこの保障を望むのみならず、子や孫までもがその得たものを享受して欲しいと思うものなのである。それ故に、私たちは年をとれば例外なく貴族主義者となる。たとえ若い頃は反対の意見に傾いていたとしても」<sup>25)</sup>と。ゲーテには近代的な意味での階級意識、それに基づく政治革命の思想は全く理解できないものであった。

晩年フランス革命を回顧しつつ、自己の政治的信仰告白を語る時においてさえ、ゲーテはこの政治革命が、社会組織・構成の本来的諸矛盾に由来するものであることを認識しようとはしなかった。それは、「永遠に果てることのない党派の闘い」<sup>26)</sup>に過ぎなかった。むしろ革命が招来した略奪、殺人を伴う暴力行為は、結果として目的は正しくとも手段において世論の支持するものとはならないことを、「政治家」ゲーテは宣言しなければならなかった。そして永遠にこの革命の政治学的分析、研究から意識的あるいは無意識のうちに目を閉ざすことになったのである。「私は非理性的なことと闘うことによって、非理性的にならないために、このひどい事件にはもう一言もすまい」と。<sup>27)</sup>そして『詩と真実』におけるフランス革命によって受けた衝撃の告白と、しかしながらこれ以外フランス革命については、彼自身何も書き記していないという事実と、この両者の間にある矛盾にこそ、ゲーテの革命観の本質が読み取られるべきかも知れない。つまり、フランス革命は、あらゆる点で彼の「悟性と理性」に基づく思索と芸術的想像力をもしのぐ「実際」の事件であったということ。

#### (4) むすび

ゲーテは、創作において革命を彼なりの概念で提起しようとして試みてもいる。しかしながら、これらの作品は、フランス革命が意識されているとはいえ、もちろんそれが直接的テーマとも、土台ともなっているわけではない。ただフランス革命がきっかけとなって暖めていた構想が練り上げられたり、また作品にある種のふくらみが与えられたものもある。ゲーテ自身『フランス戦役』の最後に、「断片的試作である移住者の談話や未完の戯曲である『怒れる人たち』は、当時私の心のうちに生まれたことの告白であるし、同様に後の『ヘルマンとドロテーア』も同じ原因から誕生したものである」と回顧している。<sup>28)</sup>実際、1793年には『市民の将軍』(Der Buergergeneral)、フランス喜劇の翻案『二通の短信』(Die beiden Billetts)の上演、『怒れる人々』(Die Aufgeregten)、『ライネケ狐』(Reineke Fuchs)、1795年には『ドイツ移民の談話』(Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten)、1796年に

かけて『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』(Wilhelm Meisters Lehrjahre), 『ヘルマンとドロテア』(Hermann und Dorothea), 1799年には『庶出の娘』(Die natuerliche Tochter)を創作あるいは改作している。

これらの作品はいずれも、フランス革命がなんらかの形で与って力があつたと考えられている。つまり、革命が挿話に過ぎないとしても、いずれも自由と正義のための代弁者であるはずの者が、実は自己の利益をのみ考え行動する怪しげな人物であつたり、革命がむしろ混乱と無秩序をもたらす結果となつたり、革命概念そのものの批判を含んだり、フランス革命軍のドイツ侵攻によって追われたドイツ貴族の悲劇であつたり、ゲーテの一貫したフランス革命への疑念と嫌悪の現れとみなすこともできるのである。また『ヴィルヘルム・マイスター』はアメリカの独立戦争からフランス革命の時期が舞台となり、様々な階層の人々が登場し、貴族と市民との根本的対立も洞察されており、『ヘルマンとドロテア』では、新旧体制の和解の困難さが問題である。

ところで、ゲーテは1799年の『日記』に特に「ブルボン・コンティ家のステファニーの思い出が、私の心に『庶出の娘』の着想を与えた。私は計画段階で入れ物を用意し、その中にフランス革命とその結果について、長年書いたり、考えたりしてきたことの全てを厳粛に留めようと思った」と書いている。<sup>29</sup>そして12月の始めには三部作としてその構想を固め、1803年には少なくとも第一部にあたる5幕を完成させ、翌年「コッタ文庫」に発表した。しかしながら、なぜか続編は創作されなかった。この「ステファニーの話」は、わけてもゲーテの心を捉えて離さず、1823年『機知ある一言による重要な促進』(Bedeutende Foerdernis durch einziges geistreiches Wort)でも『庶出の娘』についての言及がみられる。「長い年月を振り返れば、この途方もない対象が、なんと長い間にわたって私の詩的能力を何ら利益をもたらすことなく浪費させたことか。しかしながら、その印象が非常に深く私のうちに根付いていたので、細部を完成させようという気持を持たずに、相変わらず庶出の娘のことを考え続け、頭の中ですばらしい作品を創り上げようと努力していたことを否定できない」と。<sup>30</sup>この劇作のテーマは、直接フランス革命を舞台とするものではなかったとしても、他の作品における以上に政治革命とその影響が反映している。ゲーテは、『庶出の娘』とフランス革命とをその精神のうちに密かに二重写しにしていたに違いない。しかし現実の政治情勢は、20年間以上にわたり政治家ゲーテにフランス革命を歴史として解決するゆとりを与えなかったのであろうか。ゲーテの告白を鵜呑みにし、しばしこの劇をひもとくことによって彼の革命観の一端を見て取ることもあながち不当な

ことばかりとはいえないであろう。

『庶出の娘』においても革命の原因は唯一失政にある、というゲーテの信念が貫かれており、新しい革命観と観点が展開されている訳ではない。登場人物とその出身社会階層は明瞭にステレオタイプ化され、時は18世紀の革命期であり、貴族社会を背景にし、市民的観点も導入されている。王家の正当な相続人でもあるろくでなしの異母兄弟の王子が、王様が望みをかなえることによって半ば陰謀に加担している公爵を思いとどまらようとする計画の邪魔をする。そこに主人公である娘が登場する。そして恐ろしい破滅が暗示される。

確かに、伝統的な狭い価値観や秩序から広い世界へ、未来への新しい世界の運命を切り開こうする点で『イフィゲーニエ』や『タッソウ』の雰囲気とは異なり、むしろその概念は、『遍歴時代』におけるフマニテートの主題に近いものを窺わせる。個人や男女の運命ではなく、一国のそれが問題であり、劇が普遍性の一つの現れであると同様に、この国家の運命も詩人とその精神的道徳的世界を暗示するものである。それは歴史であると同時に、現実の世界の展開であり、ゲーテ自身が舞台上で表現し得る個人の生活誌の現れでもあった。主人公オイゲーニエンは、一方においては社会基盤の崩壊とともに追放の憂き目を見る。他方、彼女は第三階級の人間と結婚することにより、階級、家族、継承権を失う。どうみても生から死への道を歩まねばならないのである。しかしながら、救いは思わぬ所からやって来る。真実キリスト教を代弁し、その教えと分ち難く結び付いている人間性をもつ修道士が、キリスト教的な心の平静さと古い悲劇的世界観に終焉を与える役割を担う。このキリスト教的精神こそ、実際、生活や創作上の危機に直面したときも、進むべき道を指示してくれるもの、とゲーテは信じていた。その解決は宥和とも破滅とも言えるものである。ゲーテは、その判定を私たちに委ねている。それは、人間自身の精神によってもたらされるものではあるが、内密にその決定を下そうとする権力者により明かされるのである。

『ゲッツ』は、表面的ヒロイズム以上に歴史的なドラマであり、『エグモント』は歴史的であると同時に政治的問題がより深くえぐられ、歴史は絶えず前進し、決して後戻りするものではない、という歴史認識を提起している。歴史はゲーテにとって教師であり、永遠に妥当する法則である。偏見のない畏怖の念をもって歴史に対し、その真実から学ぶことは、ゲーテの変わらぬ精神的態度であった。ただその歴史の意味と解釈の結果により、彼自身の作品は今日でも多くの点で曖昧さと謎とを有している。『庶出の娘』も同じ歴史的、政治的前提の下で書かれたものである。

イタリア旅行から帰ったゲーテは、フランス革命という歴史的大事件に直面し、歴史の生成の研究者とならなければならなかった。『庶出の娘』は、その時代を締めくくる作品であると同時に、古典を世界史の舞台に先取りする橋渡しをしたものともいえる。しかしながら、ゲーテはこの三部作を完成し得なかった。まさに動いている歴史の動向を解釈しつつ、これを創作に織り込もうという試みは、歴史に新しい内実を吹き込むことによって現代に蘇らせようとするそれとは全く異質なものである、ということをこの文学的営為を通して知り得たからに違いない。実際、演劇による社会変革の可能性は挫折したといえるかもしれない。しかしながら、社会において役立つ人間の表現は、芸術の社会的影響を考慮した結果であり<sup>61)</sup>、ゲーテの生涯のパートナーであるシラーもまた、同じ課題を扱っていたことは、芸術の有する社会的役割がいまだ普遍性を得ていたことの現れとみなされる。シラーの『美的教育に関する書簡』(Ueber die aesthetische Erziehung des Menschen Geschlechts, 1795)の中心論点は、徳の力が個人を作り変えて、その個人が社会を構成するようにならなければ、政治的に健全な社会はあり得ない、ということであったのであるから。そしてゲーテのめざした目標が、主観性に限定を設け、経験に対し心を開くという精神の発展史の過程のうちで捉えられるとき、この意味で、フランス革命は、ゲーテに作劇術のみならず芸術理念においてもまたひとつ確固たる実りをもたらすことになった、といえるのではなからうか。

フランス革命に翻弄され、その後ナポレオンに蹂躪されたドイツの運命はヴァイマルの政治官僚ゲーテにとっては、歴史に学びつつも、なお一層量りがたいものであった。アンシャン・レジームの崩壊から恐怖政治、皇帝ナポレオンの誕生と彼のヨーロッパ制覇の野望へというフランス革命からの時代変化、一方、その影響の下、ドイツにおける神聖ローマ帝国の崩壊からナポレオンに対する解放戦争、そして諸領邦の独立の回復へという約35年間のヨーロッパの歴史こそ、まさにゲーテをして政治のなんたるものかを教えしめたに違いない。枢密顧問官という職務の重要性を考慮するとき、芸術家としての実り多き成果と比較し、ゲーテは、確かに政治家としては、歴史に名を留めるほどの仕事はなし得なかったかに思える。しかしながら、ドイツの歴史の地平に照らし、プロイセンとオーストリアとの争いや、フランス革命とナポレオンの侵略下で、実際にゲーテが「統一」ドイツという意志をもって行動したことの歴史的意義を検証するとき、「イデアリスト」ゲーテとは別の「リアリスト」ゲーテの一面にも注意が払われてしかるべきであるように思われる。

ゲーテが、客観的現実世界と主観的世界、例えば倫理的、美的な価値観との調和の上に

精神の均衡を保つことにすぐれた人間であることを思えば、この上にまた、彼の政治理念も成立していたのであり、この点において、ゲーテが、いわゆる政治権力からは最も遠い所に位置し、歴史を洞察し、そして人間精神の本性をもって革命の暴力性と戦争とを嫌悪した心情も理解できる。暴力を伴ういかなるできごとでも、ゲーテには歴史的に正当化できなかったのである。

1813年4月プロイセン王が反ナポレオンの勅令を発したとき、哲学者フィヒテ、クライストらはすぐこれに応えた。「当時の危機的な瞬間に行動をおこそうとしたプロイセンのインテリに潜在する精神」は、民族的感情と哲学的教養とが結合した、ベルリンに支配的な雰囲気への代弁に他ならなかった。ドイツ諸邦もこれに呼応し立ち上がったときでさえ、しかしながらゲーテは動かず、彼らを援助しようとしなかった。「鎖を揺するだけにしなさい。あの男は君らには大きすぎる」<sup>(32)</sup>という有名なことばに象徴されるゲーテの受動的姿勢は、兵士として戦ったアイヒェンドルフやフケー、プロパガンダの役割を担ったアルント、外交活動に力を発揮したJ.グリムらの熱狂を思うと、「非愛国的」と言えるかもしれない。

しかしながら、ゲーテは、愛国的ドイツ人を無益と思える戦いへと駆り立てることこそ無責任な政治決断であることを、彼の政治体験の歴史そのものから学んでいたに違いない。文学が「戦いを鼓舞する力とならなければならないならば、生きているゲーテではなく、死んだシラーがその司令官であった」と、当時A.ミュラーは考えたが、実際、その愛国的感情においてシラーの『オルレアンの処女』(Die Jungfrau von Orléan, 1801)が1805年から15年の間ドイツで最も好まれた劇であった。一方、ゲーテの『イフィゲーニエ』は13年間、『タッソウ』は18年間、その初演を待たなければならなかった。<sup>(33)</sup>ゲーテは、この時、時代の流れからは最も隔たった所で沈思し、深く自己の研究対象に没頭していた。

ドイツが歴史の転回点に立つとき、このときのゲーテの姿勢をもって、ドイツ人の心のうちに誇りと一種のいががしさを伴う複雑な感情を起こさせる。歴史の展開によって揺れ動くゲーテ評価をひもとくたびに、ゲーテは遠い過去の人間ではなく、政治・歴史思想のうちにいまだ生きた存在である、といえ、あまりにロマン的に過ぎるであろうか。



## (注)

- (1) Goethes Werke, hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen, IV. Ab., 47 Bd., S.302-305.
- (2) Johann Wolfgang Goethe. Gedankenausgabe der Werke, Briefe und Gespraechе, hrsg. v. Ernst Beutler, 24 Bde. und 3 Ergaenzungsbaende, Zuerich 1948-71. 11. Bd., S.622f. (以下 A と略記)
- (3) Johann Wolfgang Goethe, Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit, hrsg.v. Klaus-Detlef Mueller (Saemtliche Werke. Briefe, Tagebuecher und Gespraechе, Bd 14), Frankfurt am Main 1986. S.581f. (以下 FGA と略記)
- (4) Zit. nach : Goethe und die Franzoesische Revolution, hg. und erlaeutert v. Karl Otto Conrady, Frankfurt am Main 1989. S.36.
- (5) Goethes Werke, hrsg. im Auftrage der Großherzogin von Sachsen, IV. Ab., Goethes Briefe 5 Bd. S.312f.
- (6) FGA., S.581f.
- (7) Goethes Werke, a.a.O., S.184.
- (8) A 16 Bd., S.881.
- (9) Goethe und die Franzoesische Revolution, a.a.O., S. 28.
- (10) Ch.M.Wieland, Meine Antworten. Aufsaeetze ueber die Franzoesische Revolution 1789-1793, hg. v. F.Martini, Marbach : Deutsche Schillergesellschaft 1983, S. 8.
- (11) Goethe und die Franzoesische Revolution, a,a,O., S.28.
- (12) 「国家イデオロギーとしての文明と文化」『思想』827号, 東京 1993年 5月。
- (13) Zit. n. : H.Holzhauser, Goethe-Museum. Werke, Leben und Zeit Goethes in Dokumenten, Berlin und Weimar, 1969, S. 365.
- (14) GW, IV. Ab., 9. Bd., S.175.
- (15) Zit. n.: H. Tuemmler, Goethe als Staatsmann, Zuerich/Frankfurt, 1976, S.30.
- (16) A.a.O., S.35.
- (17) A 12 Bd., S. 240.
- (18) J.W.Goethe, Saemtliche Werke nach Schaffens Muenchner Ausgabe. Bd.19.S. (以下 MA と略記)

- (19) L. Boerne, Saemtliche Schriften, hg. v. I. u. P. Rippmann, Bd.3, Duesseldorf 1974, S.70f.
- (20) MA.Bd.19.S.493f.
- (21) Ebenda.
- (22) Ebenda.,S.82f.
- (23) Ebenda.,S.519.
- (24) Ebenda.,S.195.
- (25) Ebenda.,S.237.
- (26) Zit.nach : Goethe und die Franzoesische Revolution, a.a.O., S.170.
- (27) MA.Bd.19.S.461.
- (28) A 12 Bd., S.420ff.
- (29) A 11 Bd., S.672f.
- (30) A 16 Bd., S.881f.
- (31) Rudolf Alexander Schroeder : Goethes «natuerliche Tochter». In : Goethe im zwanzigsten Jahrhundert, Spiegelungen und Deutschen, hg. v. Hans Mayer, Frankfurt am Main 1990, S.219-242.
- (32) Zit. n. : Wolfgang Leppmann, Goethe und die Deutschen, Muenchen 1994, S.51.
- (33) Wolfgang Leppmann, a.a.O.,S. 52.

(1996年5月23日受理)